

## 随 想



### 編集委員会のことも

松下 幸雄\*

昨年春荒木前編集委員長の後を継ぎ、編集担当理事在任期間この委員会をお世話することになった。その後1年近く経過し春季講演大会を迎えようとしているが、この機会に本誌随想欄を拝借して編集業務の一端を会員諸兄にご披露いたしておきたい。

筆者が当協会の編集業務をお手伝いし始めたのが、丸の内の赤煉瓦時代（仲14号館）であるから、すでに半世紀前になつてしまつた。その回顧談はともかく、日本鉄鋼業の歩みそのままに会誌も和文、欧文とも一流の学術雑誌に成長したことは疑う余地があるまい。会誌編集委員の数でも、和文会誌分科会 22 名、欧文会誌分科会 20 名、講演大会分科会 24 名、出版分科会 8 名と延べ 74 名という多数の方々に協力頂いている。とは申しても協会編集課の職員は課長以下高々 10 名で、これらの人員が日夜業務に忙殺されているのが現状であるから、両者併せても万余の会員の 1% 以下という編集スタッフではなかなか満足頂けるような会誌（企画、実施とも）になつていないのではないかと反省している。

そこで考えられるのは、編集にまつわる機構の改革は暫くおき、委員の交替制によつてできるだけ広く各階層から編集委員が選定されるような仕組みである。原則として編集業務は会合の形で行なわれており、通信事務は副次的な操作であるから、現状ではなかなか全国的な分布が望めない憾みがある。関西から日帰りをお願いしている委員もあるが、1年を通し指定の日程で 10 数回出席頂くのもなかなか大変な苦勞である。この点何なりと具体的なお智恵を是非頂きたいものである。

さて、本号はたまたま「圧延ロールの材質と寿命」特集号であるが、この点若干ご紹介しておきたい。従来「論文特集号」として年間 4 冊刊行されていた形は本年 1 月から廃止され、文字通りの特集号が年間 2 冊お手許に届くことになつている。本年 2 回目の特集号は「鋼の脱酸と鋼材の性質」で、続いては来年「高炉の複合送風」が予定されている。本誌の性格論議は多々あると思うが、鉄鋼業の歩みとともに成長した過程からみて、将来の姿をも指向すべき面を絶えず心掛けねばなるまい。幸にして編集委員会には各分野の一線の方々が参画しておられるので、重要課題につき記録、現状における討論、将来の課題の三者を併せた特集号を発刊する企画に踏み切つた。この第 1 回の企画については、その経過とか趣旨が本号に記されているので繰り返さないが、元来が本協会として十分寄与できなかつた境界分野だけに、貴重な成果が得られるよう会員諸兄とともに念願している。なお、本号に対するご意見は是非会誌に寄せられるよう期待しているので、寄書または誌上討論をご利用頂きたい（念のため申し添えると会告の通り本誌寄稿規程は一部手直しをして本年 1 月から実施されている）。

ここで、一般会員諸氏との懇談会について一言ふれておきたい。実は昨年 6 月と 10 月の 2 回、講演大会のあり方を中心議題に編集運営委員（顔ぶれは会誌によつて知つて頂きたいと）若手会員（便宜上当方で抽出ご依頼している）との意見交換会を持つた。それには大会運営の基本問題、さらには実施の細部にわたる問題など数多くの話題が出て、今なおわれわれとして対応できかねる事項が残されたまま

\* 東京大学工学部 本会編集委員長 工博

で申し訳ないと思つている。しかしながら、たとえば日本金属学会とのプログラム編成に当たつての事前打合わせとか、討論会テーマの選定ないしその実施要領などについてはかなり具体的な改善策が構ぜられているとご報告いたしておきたい。

事のついでに、昨秋講演大会最終日の夕刻催されたジュニアパーティーについて説明したいと思う。これは編集課職員や協会技術部員が中核となつて企画し、昨秋は試みとして若手講演者(25才~35才までの会員が多かつた)を中心に招待したところ、約70名の会員が参加された。その席には編集委員の一部も加わつて、この試みはなかなか好評を頂いたものと考えている。これも会告にあるように、今春は講演者に限らず若手技術者や研究者の親睦を目的にささやかな会費自弁で多数の参加を望んでいる。これはいわば自由な放談会で、ある場合には講演会場の継続かもしれないし、あるいは学術講演を離れた社交の場であるかもしれない。筆者が前回出席した経験からいつて、会員の専攻分野が非常に幅広いこと、彼らが講演大会に何を求めているか感じ取れたことなどいろいろ勉強になつた。何時の日かまたこの年代層から編集業務をお願いする会員もいたことであろうし、学会というもののあり方がおのずからにじみ出てくる雰囲気醸成されるかもしれない。この間の情勢判断は編集課を含む協会事務局員の英知に委ねたいと考えている。

本筋の会誌に話を戻すが、ご承知のとおり春秋講演大会の発表件数に比べれば、会誌に掲載される論文の数は誠にささやかなものである。つまり極めて優秀な研究論文や技術報告が埋もれたままになつている恐れもある。これは編集当事者として勧誘の手続きはするとしても、必ずしも前記の恐れなしとしない。とくに現場技術の精髓であればあるほどこの問題がつきまとう。したがつて、筆者としては客観情勢が確定した段階で、折にふれレビューの形で集録され会誌に記録をとどめるよう努力をお願いしたい。さらには、本協会共同研究会はクローズミーティングであるから、部会報告の形で講演なり会誌投稿なりを絶えず心掛けて頂きたいと思つている。

これまでは主として和文「鉄と鋼」の話題であつたが、今一つ重要な刊行物として Transactions ISIJ (隔月発行)がある。これはいうまでもなく、日本の学術なり技術なりの進歩を海外に紹介するためのもので、和文会誌とはかなり性格が異なつている。これだけ立派な海外向け定期刊行物を発行している学会は数少ないので、是非とも有効にご利用頂きたいと考えている。最後になつたが、協会の出版事業も本格化して極めて実用的なマニュアル類から高度の理論を織り込んだ刊行物まで幅が広くなつて、現在では先刻ご承知のとおり「鉄鋼製造法」の出版準備が鋭意続けられている。

さて、編集業務にまつわる現状とか将来の一端をこれまで紹介したが、いうまでもなく会誌は鉄鋼業の縮図であり、とくに学問と技術の結晶が盛られてゆかなければならない。とはいへ近時情報量過多で個人会員がどのように本誌を利用されているのか、また将来どのように改善していつたらいいかなど建設的な勧告をわれわれ一同期待してやまない。